

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 米谷匡史



学位申請者 鄒 怡 （Zou Yi スウイ） 氏

論 文 名 Japanese War Memories and Sino-Japanese Relations from 1972 to 2017
: Textbooks, Museums and the Debates over History

【審査の経過と結論】

鄒怡氏から博士学位請求論文「Japanese War Memories and Sino-Japanese Relations from 1972 to 2017: Textbooks, Museums and the Debates over History」が提出されたことをうけ、2019年1月16日開催の総合国際学研究科教授会にて審査委員会が選任され、審査が開始された。

審査委員会は、米谷匡史（本学教授、近代日本思想史・社会思想史）が主査を務め、岩崎稔（本学教授、哲学・政治思想、主任指導教員）、フィリップ・シートン（本学教授、日本近代史・メディア研究）、李孝徳（本学教授、比較文学・表象文化論）、橋本雄一（本学准教授、中国文学・植民地文化研究）が副査となり、以上5人の委員から構成されている。

審査委員会は、各委員が論文を精査した上で、2019年2月20日（10時15分から12時30分）に、本部管理棟2階中会議室において公開の最終試験（口頭試問）を実施した。その結果、本論文が評価基準に照らして、博士学位を授与する水準に達していると判断した。審査委員会は全員一致で、鄒怡氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に至った。

【論文の概要】

本論文は、1972年の日中国交回復以降、現在に至る日中関係の変化とともに、日本国内における歴史認識・戦争記憶が変化していくダイナミズムについて、歴史教科書や戦争関連博物館・記念館をとりあげて分析するものである。社会的に構築される集合的記憶を論じるメモリースタディーズの方法論を用いて、1972年から2017年までの間に出版された多数の歴史教科書と、各地の戦争関連博物館・記念館をとりあげて、歴史認識・戦争記憶の変化を分析している。それによって、日本国内の政治状況と中国の対日外交政策が連動しながら、歴史認識・戦争記憶の変化がうみだされていることを明らかにしている。

本論文の構成は、以下の通りである。

Prologue

Chapter 1 Literature Review and Theoretical Framework

Chapter 2 Sino-Japanese Relations and Debates over History

Chapter 3 War Narratives of Japanese History Textbooks (1972-2017)

Chapter 4 War Narratives in Japan's War-Related Museums

Chapter 5 Conclusion

序論にあたる第1章では、本論文の方法的視座を提示している。非常に多くの情報や議論が行き交ってきた歴史認識問題を見通しのきくものとするために、まずは方法論的な前提を整えようと試みている。鄒怡氏が選択したのは、モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」論、マリタ・スターケンの「文化的記憶」論、アリソン・ランズバークの「義肢的記憶」論など、メモリースタディーズのなかでブレイクスルーを引き起こしてきた先行研究の成果・方法を援用するという戦略であり、それを通じて、ある社会に間主観的なものとして存在する記憶と、それを中心に構築される記憶の社会コンテキストとの関係性を、問題領域として開くことであった。また、Judgmental War Memoryというフィリップ・シートン氏の提唱してきた概念も活用し、戦争記憶のなかにその戦争を「正しい」とする感覚がどの程度組みこまれているのかによって区別される戦争記憶の語り方の類型を、分析の変数として設定した。他にも Progressive、Progressive-leaning、Conservatives、Nationalist という四つのカテゴリー等を、戦争記憶の担い手の政治的動向として類型化している。

そのような方法論的準備のうえで、第2章では、1972年から2017年までの時期の歴史認識にかかわる諸論争のなかで、集合的記憶と社会的コンテキストの関係がいかなるものとなっており、それぞれの時代において両国政府がどのように対応したのか、また日中の代表的メディアの語り方はそれとどのように相関しているのかを検討している。それは時代ごとの記憶の社会的コンテキストがどのように構築されているのかを問う過程でもあった。分析によって明らかになったのは、日中国交回復から70年代を通じて日中両政府によって採用された「棚上げ政策」の効果である。あえて未決定状態を選択するというこの政策を通じて、両者は巧みに歴史認識問題を回避し、それに対応する集合的記憶が構築されてきた。しかし、そのような暗黙の枠組は80年代を通じて動揺する。1980年代には、なおも外交的衝突を回避し、克服する努力が積極的に追求されていたが、1990年代から2000年代にいたって「慰安婦」問題と「尖閣諸島」問題が主題化し、日本国内でも55年体制の終焉に示されるような政治体制の変化が到来することによって、それまでとは異なった記憶の社会的コンテキストが構築された。さらに

2010年代の現在に至るまで、時系列的に論争状況の特徴が整理されている。これによって、本論文が対象としている時期における日中の戦争記憶についての議論の変化が、他の政治的な課題、政策面での変化、自己像と他者像の変化と関連しながらどのように変わっていくのかが明確になったと言える。

第3章では、以上の考察をふまえて、この時期に出版された117冊の歴史教科書を分析し、指標となる「日清戦争」「満州事変」「盧溝橋事件」「南京虐殺」「慰安婦」「七三一部隊」「三光作戦」「沖縄戦と原爆投下」などについての記述を網羅的に検討し、その記述のあり方の変遷を整理している。その成果は、鄒怡氏の仮説に裏づけを与えるものとなっている。

ついで第4章では、日清講和記念館、遊就館、国立歴史民俗博物館、川崎市平和館、沖縄県平和祈念資料館、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、明治大学平和教育登戸研究所資料館など、各地の戦争関連博物館・記念館をとりあげ、その展示に現れた歴史認識・戦争記憶のあり方を分析している。

結論にあたる第5章では、以上の分析を通じて、日本国内の政治環境が戦争に関する記述及び戦争記憶の傾向を決定づけているものの、中国の対日外交政策も、日本人の歴史認識・戦争記憶の形成・再形成に重要な役割を果たしていること、そのつどそれは記憶の社会的コンテクストとして再構築されていることが明らかになったと結論づけている。

【審査の概要および評価】

2019年2月20日に実施された公開の最終試験（口頭試問）では、鄒怡氏が本論文の概要、本論文の学術的意義、そして今後に残された課題について簡潔にプレゼンテーションをおこなった。その後、審査委員と鄒怡氏の間で質疑応答をおこなった。その概要は以下の通りである。

本論文は、日中関係における相互の社会的記憶の動態をあらためて明らかにしたという点で、確実にひとつの貢献を果たしている。フレームワークの整理も有益な論点整理となっている。また、117種類もの教科書を実際に検討していること、各地の数多くの戦争関連博物館・記念館を吟味していることなど、集合的記憶の形象化された実例の分析に取り組んで議論しているという点は評価できる。特に歴史教科書の分析は、重要な研究成果として高く評価された。

他方で、本論文がなお抱えているいくつかの問題について、以下のような疑問や批判も提示された。

第一に、本論文の特徴であるメモリースタディーズの方法論が、他面でこの論文をいささか形式的に硬直したものにしてしまっており、第1章で提示されるメモリースタデ

ーズの諸概念が、個々の事例の分析につねに有機的に活用されているとは言い難い面がある。

また第二に、教科書問題が外交問題化し、両国のメディアで大きくとりあげられることによって、中国と日本の国民的記憶の対立という構図が強まったのは1982年からである。それ以前の国内における歴史認識・戦争記憶の対立が、どのように国民的記憶同士の対立構図へと組みかわっていったのかについて、さらに立体的に議論を深めるべきではないかという点である。ステレオタイプな論争のあり方にとらわれないように試みているながら、やはり国民と国民の記憶がぶつかるという図式の外部には出られないではないか、とも指摘された。

第三に、本論文が集合的記憶の形象の実例として扱っている歴史教科書と戦争関連博物館・記念館は、そもそも文化的な存在形態の差異がある異なったメディアであり、メモリースタディーズのみならず、メディアスタディーズという自覚をもってより深く掘り下げるべきではなかったのか、という点である。公的なメディア・団体と私的なメディア・団体の差異、戦争関連博物館・記念館の展示の時代による変化や、受容する来場者の側の視点などについて、分析・論述が不十分であり、考察をさらに深めるべきこと、なども指摘された。

以上のような審査委員から提示された疑問や批判に対して、鄒怡氏の応答は的確かつ誠実であり、本論文で明らかにし得た点と今後に残された課題についてもそれらを明確に理解したものであった。

このような審査をふまえて、審査委員会は、鄒怡氏の博士学位請求論文「Japanese War Memories and Sino-Japanese Relations from 1972 to 2017: Textbooks, Museums and the Debates over History」は、日本と中国の戦争の記憶というアクチュアルな問題をめぐって展開される論争状況に一石を投じ、当該領域の研究に貢献する重要な研究成果であることを確認し、全員一致で、鄒怡氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。